

再スタート2年目の“Fukuoka”、それぞれの挑戦

④北欧・ノルウェー勢も表彰台を狙う＝モーエン、メスンギ

●復活が期待されるソンドレノールスタッド・モーエン（ノルウェー）

モーエンは17年福岡国際に2時間05分48秒のヨーロッパ記録（当時）で優勝した。モーエンにとっては自身の「ベストレース」だった。

「30kmまで余力を残すなど、自分の力をコントロールする走りができました。コース沿道からの応援も素晴らしかったです。福岡の人々の“マラソン愛”には感動しました」

18年のヨーロッパ選手権は途中棄権したが、19年は2時間06分16秒の自身2番目のタイムで走った。20年ロンドンでは天候が悪くて2時間09分01秒にとどまったが、順位的には9位でアフリカ勢を除けばトップだった。

21年以降は2時間10分を切ることができていない。「21年の東京五輪は準備段階でオーバートレーニングをしてしまい、失敗レース（39位）になりました」

22年はアキレス腱の故障で、2月のマラソン（2時間10分48秒）は準備不足だった。その後は新型コロナ感染とアキレス腱の手術からの回復に充てた。今年4月のマラソン（2時間10分23秒）前も「リスクのないトレーニングをしました。長い距離を走ることには不安があった」と言う。今年5月以降は故障の不安なくトレーニングが継続できるようになった。「走行距離も以前のように積めるようになり、特別長い距離のメニューも行っています」

マラソンに向けた練習では距離を走るが、モーエンはスピードもしっかりと身につけているのが特徴だ。17年も「10月のハーフマラソンで59分48秒のノルウェー記録をマークし、良い流れで12月の福岡国際までトレーニングができた」と話していた。ハーフマラソン日本記録の60分00秒よりも速い。

マラソンでは自己記録を更新していないが、19年には10000mで27分24秒78の自己新をマークした。20年8月に出場した1時間走（1時間で走った距離を競う種目。近年はあまり行われていないが、ヨーロッパでは時折り行われている）では21131mを走った。ほぼハーフマラソンの距離で、自己記録に近いタイムをトラック（50周と131m）で走ったことになる。

モーエンは自身のベストレースに17年の福岡国際と一緒に、この1時間走を挙げている。ハーフマラソンの距離のスピードを確認するのが、モーエンのスタイルなのだろう。

今年の福岡国際に向けては「12週間のマラソン練習で、最後の5週間はマラソンに向けた長い距離走をやってきました」とトレーニングが順調だったことを明かした。10月に1時間00分20秒と、17年と同様にハーフマラソンを好タイムで走っている。12週間のマラソン練習に入ってから出場し、ハーフマラソンのスピードを確認してから長い距離の練習に入った。今回は「自己ベストと表彰台」を目標に臨む。6年ぶりの福岡国際出場で、復活する姿が見られるか。

●2度目のマラソン＝ゼライクブロム・メスンギ（ノルウェー）

メスンギはモーエンのノルウェー記録更新も「簡単ではないが可能」と意気込む。

メスンギは東アフリカのエリトリアから国籍を変更した選手だが、変更以前からノルウェーの大会には頻繁に出場していた。モーエンの活躍は刺激になっていたようだ。

「4～5年前から福岡国際に出ることを考えていました。モーエン選手が2時間05分48秒で走った後、福岡はすばらしい大会だと話を聞いていました」

37歳のベテランだが、国際大会に出場し始めたのは26歳のシーズンの12年から。当時はフランスの試合に出場していた。16年頃からノルウェーの試合に多く出場し始め、3000mと5000mのシーズンベストはほとんどがノルウェーの大会で出している。

20年にはノルウェーに帰化。22年8月のヨーロッパ選手権(2位)、今年8月の世界陸上(18位)はノルウェー代表として10000mに出場した。「ヨーロッパ選手権がベストレースです。計画通りにトレーニングができ、良いレースができました」

その4カ月後の22年12月に、バレンシアで初めてマラソンに挑戦。2時間07分10秒をマークした。

今季はトラックの5000mと10000mで自己記録を更新している。トラックで好走して12月のマラソンを走る。そのパターンを2年続けることで、2度目のマラソンとなる福岡国際ではプラスアルファが期待できる。

目標に「自己ベスト更新と優勝」を掲げるメスンギ。優勝争いに加われば、モーエンの2時間05分48秒が見えてくる。